

学校の中心で「哀」をさけぶ

四限目の終了チャイムが鳴り、当番の生徒たちが給食準備にエプロンのヒモを後ろ手に結びながら二階から下りてくる。と、給食配膳室の前の奥まった廊下のつきあたり、遠目ながら何か異様な光景に生徒の手と足と視線が止まった。

“給食のおばさんが男の人に手を握られ困惑した表情を浮かべている”のである。しかもよく見れば男の人は校長先生ではないだろうか。

第三者が何かを判断するときの材料はその時々でいろいろあろうが、無意識の隠れた判断要素があることを見逃してはいけない。それは「あの^人ならあり得る」という先入観である。これが非常に危険で「その^人」にとっても大変不幸な結果を生むのである。「心成しか…」という言葉が示すように、どんな状況でも「そう思っで見れば」「そう見える」のである。

さて、先ほどの状況にもどろう。事の成り行きはこうである。

前日、養護教諭から校長に対して「給食調理員の爪が伸びていて、生徒の配膳を手伝ってくれるのはありがたいのだけれど、衛生的にも教育的にも良くないから注意してほしい」という申し出があったのである。

定年退職を間近に控えている現業職員への改善指導は、過去の経験からしてあまり好結果を生んでいない。さりとて、生徒の教育、健康にかかわる重大な問題だと訴える新任養護教諭の要請に耳を貸さないわけにはいかない。こういう場合、たいていは教頭にお問い合わせすれば事はうまくいく。しかし、今年度より本校には教頭は配置されていない。万事休すである。

しかたがないので給食調理が終わったところを見計らって、調理員に声をかけ、廊下まで出ていただいた。まず、普段の労をねぎらうことを忘れず、間をおいてから手を見せてもらった。確かに指摘のとおり親指の爪は相当伸びている。衛生上切るようお願いするが果たして彼女は反論に出た。「この親指の爪はタマネギの皮をむくのに便利で、しかも爪そのものは清潔にしているから大丈夫だ」と。さすが百戦錬磨のおばさんだ。しかし、校長たるものここで納得したり感心したりしている場合ではない。一呼吸したところで四限終了のチャイムが鳴った。養教の悲痛な表情が脳裏をかすめた。気を取り直して、「じゃ、もう一方の手を見せてください」さし出された調理員の手を両手で軽く握り、親指の爪を確認した。「こちらの爪も伸びているじゃないですか。タマネギの皮むきは別の方法を工夫するとして、やはり調理にたずさわる者は爪は切っておいてください！」「…わかりました」

調理員の手を解きながら後方をふり返ると、階段の下でエプロンを結ぶ手を止めたままこちらを凝視しているいくつもの生徒の目があつた。

「いや、君たち、その…ちがうんだ！」